

行き違い

西村 善彦

財団法人 静岡県予防医学協会
静岡センター 附属診療所長



略歴

昭和40年	京都大学医学部卒業
昭和56年	兵庫医科大学耳鼻咽喉科学助教授
平成4年	同 教授
平成5年	京都大学医学部形成外科学教授
平成14年	同 名誉教授
平成14年	島田市民病院院長
平成20年	同 名誉院長兼臨床検査科部長
平成21年	同 嘱託医

いつの頃からか記憶がはっきりしないが、新幹線の車掌が車室への出入りの度に律儀に最敬礼するようになった。律儀にと書いたが、私には何とも不自然な動作に思えて仕方ない。この動作あるいは作法と言っているのだろうが、これをとても律儀などとは思えないのだ。民営化してから大分経ってから始まったことである。何がきっかけでこんな仕儀になったのだろう。何のために。も一つ、乗客は私のように余計な動作だとは思わないのだろうか？いつまで経っても続けているとこをみると殆どの方々には不快には感じてないようだ。私の理解を越える。「皆様のJR」を誇示したいが為の押しつけがましい動作を車掌は演じ、乗客はそれを苦々しく



思っているとしたらどうだろう。あるいは滑稽だとも感じているかもしれない。私は苦々しいとも滑稽だとも思っている一人なのだ。JR従業員に乗客が求める最大のものは、時刻通りに且つ安全に目的地に運んでくれることだ。その上で騒音も揺れも少なく、適度な車内温度で座り心地の良い移動を提供してくれたらそれで充分だ。それ以上の何物も求めない。車掌の出入りは業務遂行上必要なことだ。その業務とは前述したことを不断に実行するためにある。入ってくる時に軽く会釈するならともかく、退室時に回れ右をして両足を揃えて深々とお辞儀をするのは何の意味があると言うのだ。ドア通路側の席の乗客には迷惑で鬱陶しい。この動作がどれほど時間と手間をとり、車掌本来の業務を阻害しているかは考えるまでもない。勘ぐれば「手前共は礼儀を弁えた社員です。数々の運行上の不手際があるかも知れないが、こうして卑屈なまでに予め謝っているのです」ってことかと嫌味の一つも言いたくなる。業務に支障がない限りにおいて、入ってくる際に軽く会釈する位が乗客と乗務員との適度な関係を生むと言うものだ。退出時の馬鹿丁寧な動作は滑稽を通り越して不愉快ですらある。

ところで、医療に同じような事象はないのか？筆者は直近の数年間ある地方の公立病院で働いてた。そこで見聞きした数々はJRの業務に対する姿勢にある種通じるものがあった。例えば、掲示はともかく、口に出して「患者さま」と呼び捨てた。初めて耳にした時は「そんなに卑下して！患者と医療関係者との上下はないのだよ」と声こそ出さなかったが嘔吐しそうだった。下心を感じざるを得なかった。私共は患者さまのシモベです、これからどのような不手際があるろうとも、少なくとも無知や高慢から生じたことではございません、と。患者さんにとってはそれまで些か高慢だったかもしれぬ、しかし大多数の医療者が患者さんのために良かれと思ってあらゆる医療行為が行われて来たと思っている。勿論、「患者さま」と呼び呼ぶようになってからも。いかさまな怪しからぬ医療

者が居たことは認めよう。しかしそれは一握りの不届き者だった。それらは今も居よう、どんな職種にもごく少ないが一定の率で不埒な輩は居るものだ。「患者さま」と呼び呼ぶようになって根絶された訳ではなく、現状の重苦しい環境はむしろ真面目な医療者にとってはとてつもない大きな苦痛となって覆いかぶさっている。医療行為がなされる際に「説明と同意」はいつだって求められていたし、当然なことだ。ただかつては「先生、たのんまっさ」「ほな引き受けようか、頑張ってみるわ」「すっかりお任せします」これで全て良かったことが多かった。今様に言えば、患者と医者とは信頼関係で結ばれてた、と言ったところか。

ところが「患者さま」になってからか、それが故に「患者さま」になったのか、結末が患者さま、あるいはその親族縁者の思い描いた通りにならなかったら「こんなことになるなんて一言も聞いてない」はては「これは医療過誤か」となり、まれに訴訟にまで発展する。疑いの眼差しが絶えず医療者の一挙手一投足を射るようになった。強者である医療者（悪者）、弱者の患者さん（善人）と決めつけて、大きな活字がある時期から新聞紙面を踊るようになった。次々と、活字だけでなくテレビでも。詰まる所、医療を受ける側が納得できない結果が生じたら司法に訴える方向に世論を導いたのである。司法試験のハードルを

下げて毎年の合格者を何倍にもして契約社会の下地を整えていたとは何と素晴らしい施策であったかと感嘆する。話を元に戻そう。病魔に冒された患者は医療者に何を求めているのか？病魔からの解放である。医学や医療は日々急速な進歩を遂げることが報道されてるから、殆どの病気は治るものだと錯覚している患者さま方がかなりいらっしゃる。試験管の中での、あるいは小動物での成功例が即治療に直結するようなマスメディアの報道や「ゴッドハンド」などと謳った視聴率稼ぎの眉唾番組が医療に関して無関心な方々の注目を集め、市民への啓蒙がなされている。医者は病気を治すのが仕事だろう、と嘯く純朴な患者さまが出てきても不思議はない。有態に言えば病院へ紹介状を持たされて受診される方の患っている病気の多くはあらゆる適切な手立てを施しても完治は望めない類のものが多い。ここに患者と医者との齟齬が生れる余地がある。そこで、最初から行き違いがあってはならないので病者と多くの場合その方の縁者と共に病態をしっかりと理解して頂き治療方針を細部に亘って説明することに多くの時間をかけ、しかもそのことを電子媒体に記憶させる作業が必須となった訳である。簡単に「理解と説明と同意」と言うが、どれほどのエネルギーを要するかはお分かりであろうか。医学の知識が皆無の方々に噛んで含むようにお話をし、内容のご理解を頂きその上で納得頂くことは至難の業である。極論すれば病態を理解するには医者にすら難しいこともある。従ってどれだけの時間をかけても時として極めて困難な作業なのである。しかし全ての医療行為、それは検査、投薬、注射そして手術、いずれをとっても、その意義と期待される効果、併せて危険性等々につい

ての説明が治療を受ける側の病魔への対決の意欲を削いではいならないし、治療側の意欲をも削いではいならないのは当然である。ところが現場では様々な問題が生じ、患者さまと医療者との緊張関係からおこる互いに不快な出来事の解決に病院幹部は頭を痛めることになる。たまに、権利の主張だけを是として育った患者さまとの折り合いは生半可な忍耐では対応できないこともあると聞く。縁者あるいは近親者への説明の為のご都合の良い日時をお聞きするだけでも疲れること屢々である。多くは土日か平日なら夜7時以降を指定なさる。じっとお待ちしようやくお会いできても、当方の差配に対して露ほどの礼もお示しにならない方々もいらっしゃるのである。困ったことに時として本格的な治療が始まるまでにこちらはかなり疲労し消耗してしまう。口での説明、その記録、分厚い書類の作成、病院勤務の医療側の仕事量は幾何級数的に増加した。なぜこんな事態になったのだろうか？数年来の生半可な情報の氾濫、医療者への過酷なまでの結果責任の追及、旧来の医療者の高慢さや横柄に対する患者側の不満の鬱積（復讐とまで言ったら言い過ぎだろうか、...。メディアがそれを煽った一時期があったことは確かだ）、などが積算された結果であろう。確かに怪しからぬ医者や看護婦が居たことは認めよう、その者達を決して擁護するつもりはない。断罪すべき輩はどの業種にもいたであろうし、今でも居る。全員がそうなのではない。振り子は思い切り反対側に振れている。その結果、医者があらゆる医療行為に臆病になり言い訳の鎧を身につけ腰が引けてしまった事実は深刻だ。振り子はい



ずれバランスのとれた位置に落ち着くであろうが、今は双方にとって得るものは少なくお互いに不幸だ。今日も新幹線の車掌は深々と身を屈め、医療者は腰をあくまでも低くして卑屈な汗を流しながら患者さまの前に跪き過酷な吹き矢を避けようと書類

作りに懸命である。それに矛盾を感じたり置かれた立場に耐えられなくなった勤務医は不本意ながら現場からの逃亡を図ってしまう。

さて、しばらくの助走期間を経て私は検診事業所の一員となった。幸いなことに、ここでは受診者と私共の関係は極めて気持ちの良いものである。受診者が深刻な病者でないことからくる気持ちのゆとりが醸し出す何とも言えない穏やかな雰囲気は何十年と過ごしてきた病院勤務、とくに直近数年間の言いようのないささくれだった人間不信の気持ちが日に日に洗われる思いである。受診者が健常者であることをしっかりと認識し、極めて些細であっても決して過失があっては許されないことを自戒し、業務に専念しよう。私のつまらない医師人生の最後を彩るに過分な職場を与えられたことを感謝している。

編集後記

健康診断の結果をもらって自分では覚悟は、していたものの一年間で体重が3kg・腹囲が3cm増えていた。体重とズボンのサイズが若い頃から変わらない事が自慢でメタボなんてひとごとと思っていた自分にとっては、メタボ寸前の危険な状況になってきた。特に腹囲が増え始め、はけるズボンが限られてきてしまったのである。まさしく不経済なのだ。そこで生活習慣を見直しメタボ撃退を心の中で密かに誓う。この十数年、睡眠優先で朝食を摂らなかつたのであるがまずは、三食を摂ろうと少し早く起きてバナナと牛乳だけでも口に運ぶ。夜は、大好きなビールを350ml缶2本までとし、週2回の休肝日の設定復活。何処に行くにも車を使っていたが出来る限り徒歩や自転車で行動する。思いつくことから始めたのであるが意思を強く持ち、生活習慣を変えるのは、結構シンドイ。さて来年の今頃、メタボ撃退なるかそれとも「はけるズボンが一本もない！」なんて最悪の事態だけに、ならないようにがんばってみる。

(T・I)

